

## 小説家の四季 二〇一八年 冬

佐藤正午

年四回、春夏秋冬と三ヶ月ごとにめぐってくる連載の締め切りを一回とばすと半年もあいだが空くとばす、というのは編集者と電話で交渉して原稿書きを怠けるという意味だが、前回それをやったので、これが半年ぶりになる。

しばらくでした。

と、一言挨拶をして、さっそく半年前の続きに入る。

半年前のその日、僕はなじみの居酒屋で梅酒をちびちび飲みながら待ち人を待っていた。そこに現れたのは初対面の編集者で、その人は僕にSNSの話をした。フェイスブックって、みんな本名でやってるから、知り合いを見つかるのも簡単だし、むこうも簡単にかちを見つかります。たとえば学生時代の友人で、卒業後に連絡が途絶えてて、いまごろどうしてるのかなあ、どこで何の仕事に就いて、どんな年の取り方してるのかなあ、いまどんな顔になってるのかなあ、なんて思ってた人も、フェイスブックであっさり再会して、情報は得られるし、写真だってアップされてるから、おた

が、ああ、こんなふうになってたんだ、みたいなことになります。あの人、いまどこに住んでるのかなあ？の、？マークが消える。たぶんこんな仕事してるんじゃないかなあ？とか、きつと結婚して子供もいるんだろなあ？とか、スーツの似合う大人になって、おなかに贅肉がついて頭には白いものが混じってるんだろなあ？とかの、勝手なイメージが正解か不正解かわかる。いままで解かれなかった問題の、いわば「答え合わせ」ですね。フェイスブックだと簡単に答えが出る。そこが便利といえれば便利だし、でも問題と解答が一緒になった参考書みたいな便利さで、味気ない感じもします。疑問形のまま、？マークをもうちょっと自分の頭にとどめておくというか、想像の余地を残しておいたほうがよかったかも、その人の現在の「答え」を見てしまったあとで、そう思うこともあります。……うる覚えだが、だいたいそんな話だった。そんな話を聞いて、僕はサイン会のことを思い出した。『図書』の「こぼれはなし」欄で紹介された佐世保でのサイン会のことを。地元佐世保でおこなわれたサイン会には僕の高校時代の同窓生が何人か来てくれた。

さっそくにもほぼがあるかもしれない。

これでは読まされるほうもついて来られないだろうし、書くほうだって気持が追いつかない。半年前、といっても前回のタイトルは「二〇一七年夏」で、今回が「二〇一八年冬」だから年をまたいでいるし、気分的にかなり時間の隔たった半年前である。去る年の夏、なんなら遙かかなたの夏、と

言い換えてもいい。そうすると、地元佐世保でサイン会がおこなわれたのは春だったから、それよりさらに遠いあなたの出来事になる。

つまり(気分的に)遙かあなたの夏と、さらに遠いあなたの春の出来事とを結びつけてこれから書くこととしているわけである。だいじょうぶか、書けるのか？ ていうか、ついて来れるのか？

おたがいのために事実関係を整理しておこう。

昨年、二〇一七年四月初旬、これがそもその発端なのだが、小説『月の満ち欠け』が刊行された。四月中旬、刊行記念と銘打ったサイン会が長崎市内と佐世保市内の書店(さん)で催された。

五月、担当編集者がそのサイン会の様子を『図書』の「こぼればなし」欄であますところなく書き、小説家の仕事を奪った。

六月初旬、担当編集者とは別の、初対面の編集者と佐世保のなじみの居酒屋で待ち合わせて会った。そのさいフェイスブックの話をその人がしたので、僕は四月のサイン会に来てくれた高校時代の同窓生の顔を思い出した。

六月中旬、ポケモンGOにおけるTLが39に到達した。

おなじく六月中旬、僕は「二〇一七年夏」の原稿を書いて小説家の仕事を奪った編集者への不満を表明し、「こぼればなし」欄に載った文章の重箱の隅をつつき、十分につつき切れないので、続きは次回にゆずる、と予告して稿を終えることになった。

そういう流れで来て、その次回というのが、いまだである。

なおポケモンGOのくだりは、何のことかわからなくてもほっといてかまわない。こういうのを挟めばウケるかと思っ書いているのだが、ウケないならウケないで仕方がない。

さて。

これでもうついて来られると思うし、ダメな人は途中の「さっそくにもほどがあるかもしれない」のあたりで、短気を起こしてとっくに読むのをやめていると思う。

まだ読んでいる人のために、あらためて、さっそく半年前の続きに入る。

四月に地元佐世保でおこなわれたサイン会には高校時代の同窓生が何人か来てくれた。誘い合わせと一緒に来てくれたらしく、数人ひとかたまりになって列に並んでいた。数人というのは、五人か六人か、そのくらいのことだ。全員女性だった。男性は誰も来なかった。あとで思ったのだが、男性の同窓生は佐藤正午の小説など関心がないのかもしれない。それか、そもそも佐藤正午という小説家の存在を知らないのかもしれない。だから女性陣に誘ってもらえなかったのかもしれない。

まあそのへんはいい。この数人の女性たち、年齢からいって、おばさんたちと呼んでも失礼にあたらない(と思う)人たちのことを、『図書』の「こぼればなし」欄の筆者は「佐藤さんの高校の同窓生のみなさん」と書いている。念のため、再度引用しておく。

佐世保は佐藤さんが居を構えておられる街。地元での初のサイン会ということもあって、(中略)

たくさんのファンの方が来場されました。また、佐藤さんの高校の同窓生のみなさんや、行きつけのお店のスタッフといった顔なじみの姿も。

この部分を読んだだけで、もう、重箱の隅をつつきまくりたくなくなる。「居を構えておられる」って表現はどうなんだ？ これだとそうとう金をかけた立派な邸宅に住んでおられるみたいじゃないか、そのうえひとかどの人物で「佐藤さん」よりは「佐藤先生」のほうが似合いそうじゃないか。な？ そういう先生が競輪やるか？ 競輪はまだしもポケモンGOまでやるか？ 両立させるか？ とか、「地元での初のサイン会」というのもどうなんだ、厳密には「初」はまちがいじゃないか？ だって一度、なりゆきで、というか「ちよつとした行き違いで」やるつもりはなかったサイン会を地元の書店でやったことがあるし、それを僕は「比類なき、小さなサイン会」と名づけて、この「小説家の四季」の連載で報告もし、一冊の本にまとまったエッセイ集『小説家の四季』のなかにもちゃんと収録されている。その本を編集したのはほかでもない「こぼればなし」欄の筆者自身ではなかったか？ 自分が編んだ本に作家が書いていることを忘れちゃったのか？ とか、つつきどころは多々ある。でもいまはそういうのは置いておく。

前回の続きで僕がこだわるのは、引用文の後半である。

ここはどう読んでも、ことさら重箱の隅をつつく態度でのぞまなくても、ふつうに読んで「佐藤さんの高校の同窓生のみなさん」と佐藤さんが「顔なじみ」の関係であるような意味に取れるだろう。

でもそれは違う。「行きつけのお店のスタッフ」とはそもそも「高校の同窓生のみなさん」とはそうではない。顔なじみでも、顔見知りでもない。しばらくでした、といった程度でもない。正直にいうと最初、年齢からいっておじさん作家である僕は、一瞬、サイン会の列にひとかたまりのおばさんたちを目にしたとき、ほんとに一瞬なのだが、なんなんだよ？ 書店(さん)側が雇ったクラカ？ と疑惑を持った。これまでやったサイン会では見たことのない年齢層のグループだったからである。

彼女たちの順番がまわってきてなかのひとりが前に立って本を差し出したときも、僕にはよく事情が呑みこめていなかった。すると彼女の背後にいた仲間のおばさんが声をかけた。佐世保の方言で声高に喋った。方言をここにそのまま書いても意味が通じないというのではなくて、方言をそのまま書くところの文章の基調がみだれるので書き言葉に翻訳すると、だいたいこんな感じだった。

「ほら○○、名前を教えないと、佐藤くんにはあなたが誰なのかわからないよ」

○○にはその女性の愛称が入るのだが、それでは彼女が誰なのかわかった。もちろん顔にも見覚えがあった。高校時代のクラスメイトだ。卒業以来、四十何年かぶりの再会、の瞬間である。彼女は照れくさそうな顔をしていた。相手が誰だかわかってみると、僕だって照れくさかった。もちろん時間が許せば、おばさんとおじさんどうし、積もる話もあったかと思う。でも道端でばったり会ったのではなくサイン会進行中の再会なので、積もる話をしていない場合ではない。手順に従って本にサインを書くしかない。作家づらして書き続けるしかない。次のかたどうぞ。

あとでその僕の応対について、なんというか、アイドルの握手会では「塩対応」という言葉もあるらしいし、四十何年ぶりの再会なのに感動がしょっぱいとか、同窓生のよしみで本を買ってあげたんだから、ひとりひとりに表情や言葉でもっと感謝の気持ちを伝えろとか、居残ったおばさん連中にたんと説教されるかと思つたが、そんなことはなかった。サイン本を手には彼女たちはさつと引きあげていった。そのこともふくめて、同窓生たちとの再会は、第一に予想外、第二に気分の良い後味として記憶に残った。

で、それっきり彼女たちの誰とも会わなかった。

おなじ佐世保に住んでいるのだからどこで鉢合わせしてもおかしくないはずだが、事実これまで四十年以上そんなことは起きなかったのだし、いまさら急にどこかで出くわすなんて偶然もない。地方の街といつても、人と人との出会いはそんなものだ。

そして六月になり、新顔の編集者が佐世保を訪れた。

その人は僕にフェイスブックの話をして、学生時代の友人とのネット上での再会を「答え合わせ」のようだと語り、それを聞いて僕は、なるほど、と思つた。フェイスブックの実体をよく知らないで、そのくらいの感想しか持てなかった。と同時に、頭はしぜんと四月のサイン会に来てくれた同窓生たちのことに向いた。

ほんとにいまさらなのだが、僕は、彼女たちがどこで、どんなふうに人生を送ってきたのだろう、現在どんな境遇でどんな暮らしをしているのだろうと（ふと）思つた。どこで、というのは、この佐世

保という街のどこで、という意味だ。かつてのクラスメイトも僕も、このおなじ狭い街で、ひよつとしたら何十キロも離れていない場所、ずっと暮らしてきたわけである。四十何年間、ただの一度も会うことなしに。その間、小説書きの合間に、僕は何度か、高校時代の教室の彼女の記憶をよみがえらせ、いまだうしているかな、と思つてみたことがあつたかもしれない。あるいは彼女のほうも、佐藤くんはどう変わったかな、どんな大人になったかな、くらいは思つたことがあつたかもしれない。忙しくてそんなヒマはなかつたかもしれない。あつたのかなかつたのか、それはわからない。

わからないし、どっちでもいい。

あつてもなくても、それが今後も続いていく。

おなじ街に暮らしていても、道端でばつたりの偶然が起きないかぎり、何もかも曖昧なまま、続いていく。彼女はいまだどこで何をしているのか？ そういう問いかけは、本人にとっては大きなお世話に過ぎないだろうし、僕にしても、その？マークを抱えたままでは生きていけないというほど大問題ではないから、このまま、長生きすればするだけ、曖昧さにつきあうことになる。

現にあれから半年が過ぎたいまも、以前と変わらない。おのおの自宅に持ち帰つたサイン本の『月の満ち欠け』を、彼女たちが読んでくれたのかどうかともわからない。というか、もともと彼女たちが佐藤正午の小説を一冊でも読んだことがあつたのかどうか、そんなことすら僕は知らない。

以上、これが「同窓生のみなさん」と僕との関係の真相である。

前回から「こぼればなし」欄の筆者の「顔なじみ」という表現にこだわり、重箱の隅をつついてい

る理由、および、その正当性についても、納得していただけたらと思う。